YU-INFORMATION
No.114
山口大学広報誌

7
2013

特集

理事・OB鼎談

今、社会が求める人材像とは？

県内外で活躍中のOBが
理事と熱く語る！

YAMAGUCHI UNIVERSITY
山口大学

YU-INFORMATION
No.114
山口大学広報誌

7
2013

cover story

[今月の表紙]

山口大学に在学するほとんどの学生が1年～2年間を過ごす共通教育棟。
講義時間中には静かな廊下が、休み時間になると一斉に教室を移動する学生達で一杯になり、しばらくすると、また喧騒がウソのように消え、閑散とした景色になります。
廊下に差込む光とそれが作る柱の影が、見慣れた風景をちょっと不思議な空間に変えてしまう。過去からつながるトンネルのような景色の中で、彼女が見るのはどんな未来なのでしょう。

contents

02

今月の特集

理事・OB鼎談
今、社会が求める人材像とは？

山口大学理事 副学長　纐纈 厚
宇部興産株式会社 常務執行役員　岡田 徳久 氏
島根県 中山間地域研究センター 中山間地域支援スタッフ　檜谷 邦茂 氏

07　山大の成果
繋がることでわかる日本史
山口大学人文学部 人文社会学科
橋本 義則 教授

11　[山大の成果～番外編～]
学長ウダヤナ大学名誉教授
および客員教授の称号を受称

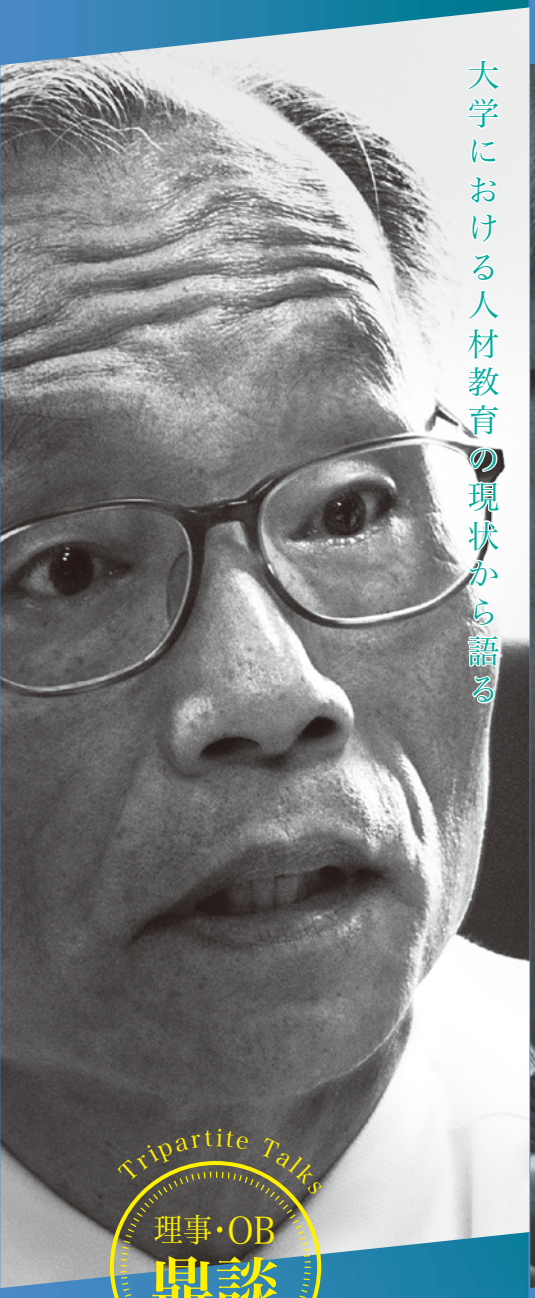
地域貢献への取組み

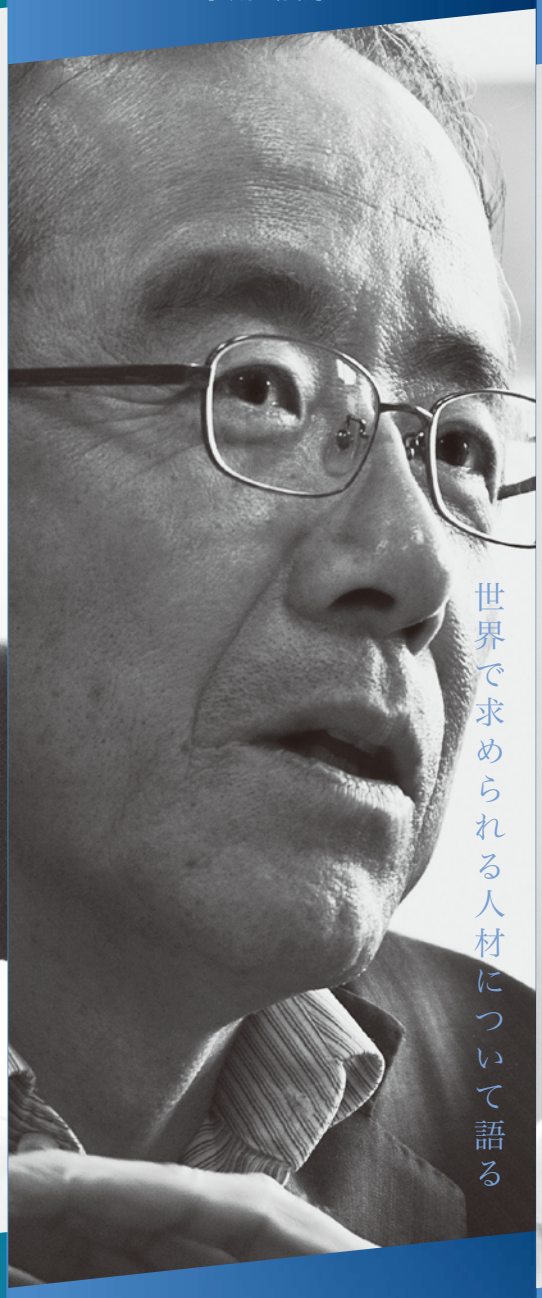
12　おもしろプロジェクト

13　What's New? YU-PRSS

14　EVENT SCHEDULE

Next Issue





Tripartite Talks
理事・OB
鼎談

今、社会が求める人材像とは？

纐纈 厚
山口大学理事 副学長

×

岡田 徳久
宇部興産株式会社 常務執行役員

×

檜谷 邦茂
島根県 中山間地域研究センター
中山間地域支援スタッフ

日本マーケットの縮小、世界レベルでの情報格差の解消など、社会構造が大きく変容する中で、
求められているのはどんな人材なのか？ そのために大学でどんな力を身につけるべきなのか？
そこで、纐纈理事と県内外で活躍するOBに、現在の社会が求める人材像について、熱く語っていただきました。

SPECIAL FEATURE
今月の特集

今、社会が求める人材像とは？

理事・OB 鼎談

Kouketsu Atsushi 纐纈 厚 理事 × Okada Tokuhisa 岡田 徳久 氏 × Hinokidani Kunishige 檜谷 邦茂 氏

［ライター］小野 理枝

工学部大学院を修了後、宇部興産株式会社に入社し、世界中を飛び回ってきた岡田徳久さん。一方、人文学部を卒業し、全国初・全国唯一の中山間地域専門の総合研究機関「島根県中山間地域研究センター」の支援スタッフとして活躍する檜谷邦茂さん。異なる経歴を持つお二人に、纐纈理事を交えて、社会で求められる人材について、忌憚のないご意見を伺いました。

大切なのは何を表現するのかという“モチベーション”

――まずは、在学中のお話から聞かせていただけますか？

岡田: エンジニアとしてものづくりに携わっていきたいという思いはありましたが、実は将来についてはあまり深く考えていませんでした。入社して、主に自動車の部品をつくる機械の設計に携わり、自動車産業の海外進出に伴って、海外に出掛ける機会が増えていきました。アメリカ、カナダ、メキシコをはじめ、ヨーロッパ、ロシア、中国、韓国、東南アジアなど、これまで訪れた国は30カ国を越えます。

纐纈: 岡田さんのように世界で活躍する人材を育成しようと、本学でもさまざまな取り組みを行っています。そのうちの一つが、昨年打ち出した国際化推進宣言です。「維新の山口から世界の山口へ」をキャッチフレーズに、明治維新で近代日本を切り拓いた長州ファイブの精神にあやかって、「発見し・はぐくみ・かたちにする 知の広場」の理念のもと、学生の海外留学促進、

留学生の受け入れ強化などを行っています。さらに、TOEICを共通教育に取り入れた英語カリキュラムを実施していますし、その他にもTOEIC目標スコア別あるいは英語のみの授業のクラスを別途展開するなど、英語力強化にも非常に力を入れています。しかし、英語は一つのツールであって、最終的な目的ではありません。そこのところを混同して、語学習得を目的化している学生もいるように感じます。一番大事なのは、モチベーションです。自分が何をやりたいのか、何を伝えたいのかをしっかり持っていれば、極端な話、下手な英語でも通じると思うんですよ。

岡田: 実は私、英語が一番苦手だったんです（笑）。入社してまもなく、フォードの担当者が機械の製作状況を確認するために、数ヶ月宇部に滞在されたことがありました。そのとき、辞書を片手に、単語を羅列し、必死で対応しました。単語を並べたり、技術屋なので絵を描いたりしてコミュニケーションをとるうちに、少しずつ会話ができるようになっていきました。

纐纈: 私は50代から中国語を学び始めました。中国の学会に行くときは、中国語で話します。つたない中国語ですが、伝えたいという気持ちが強いと不思議と通じてしまうんです。今は台湾語を習得しようとしています。何でも楽しみながら挑戦するということが大切ですね。

――山口大学には、学生が主体的にチャレンジする「おもしろプロジェクト」というユニークな取り組みがありますよね。

纐纈: 簡単に言うと、学生の自主的・能動的活動への資金支援制度です。この制度は1996年、広中平祐学長の時代に誕生しました。学生の皆さんが、発見し、はぐくんだ「夢」を「かたち」にするために、年間最大100万円という非常に高額な支援を行っています。学内にホタルを飛ばそうと試みたり、地域貢献活動を行ったり、皆さんさまざまな取り組みを行っています。学生の果敢な挑戦に、大いに期待しています。

檜谷: 私は、在学中そうした学内での活動には参加しませんでしたが、子どもたちをキャンプに連れていくなど、学外の活動には積極的に参加していました。実際に就職活動を始めたのは４年生の10月から。当時、バイト先でホームページの更新を担当していた経験から、IT業界に興味を持ち、東京でシステムエンジニアとして就職しました。しかし、結婚して、子どもが生まれたのをきっかけに、故郷である島根県にUターンしました。あのとき反省すべき点は、地元で仕事を探そうとしたことですね。せっかく都会にいたのですから、つながりを持ったまま地元に帰ればよかった。当時は、そういう発想が頭になくて、帰ってから仕事を探せばいいと漠然と考えていました。

纐纈: 仕事や人など、都会でのつながりを田舎に持ち帰るという発想は、非常に大事なことですよね。

岡田: 企業においても、そうした人とのつながりは非常に大切です。組織といっても、個と個の

Profile ［プロフィール］

山口大学理事　副学長
纐纈 厚 こうけつ あつし

1951年（昭和26年）　岐阜県生まれ
1991年山口大学教養部助教授
同教授を経て1996年から人文学部教授。
2010年山口大学副学長就任
現在、山口大学理事　副学長（教育学生担当）

宇部興産㈱　常務執行役員
岡田 徳久 おかだ とくひさ

1956年（昭和31年）　佐賀県生まれ
1980年山口大学大学院工学研究科修了後、
宇部興産株式会社に入社。
2000年に宇部興産㈱機械事業部が分社化・
発足した宇部興産機械株式会社に出向し、
代表取締役社長、宇部興産㈱執行役員を歴任。
現在は宇部興産㈱常務執行役員、宇部興産機械㈱
取締役会長として指揮を執っている。

島根県 中山間地域研究センター
中山間地域支援スタッフ
檜谷 邦茂 ひのきだに くにしげ

1979年（昭和54年）　島根県益田市生まれ
山口大学卒（人文学部言語文化学科英米語文化論コース）
東京でシステムエンジニア勤務後帰郷、地域づくり
支援やNPO活動などにも取り組み、アウトドアを軸と
した交流人口拡大や観光事業にも力を入れてきた。
2013年6月から山口県中山間づくりコーディネーター。
岩国市周東町獺越（おそごえ）地区の課題解決にも
取り組んでいる。

つながりから構成されていますからね。仕事で知り合った人々が世界中に点在していて、今でも時々、情報交換をしています。人とのつながりは有り難いなとつくづく感じています。

自分の目で確かめ信頼関係を築く

――お仕事をされる上で、どんなことを大切にされていますか?

岡田: 先進国、新興国に関係なく、どんな国においても、相手との信頼関係を築けなければ、前に進みようがありません。そのためには、まず正直、誠実であることが必要です。相手の立場で考えることも大切です。それぞれ立場や目的は違います。満足していただけるものづくりを行うためには、相手と真摯に向き合うことが必要だと思います。それに、一方的にいろいろなことを要求されても、違う場合は違うと対等に主張しなければならない。ギブ&テイクの世界ですね。それから、その国の歴史、文化などの背景を事前に勉強し、地域や人々を尊重すること。これは日本国内においても同じことが言えると思います。

檜谷: 私が地域づくりに関わる上で大切にしているのは、現場です。マクロ的な視点で見ると地域における共通項はあります。でも、それぞれの地域が有する特性は違う。現場を見ずに処方箋を用意するのは危険だと思いますね。

岡田: 私も他人からの報告だけで判断するのではなく、実際に現地に足を運び、お客様の話を聞き、自分なりに納得するようにしています。というのも、同じ単語を使っていても、それぞれ理解度が違うんです。情報が本当に正しいかどうか、自分の目で確かめるようにしています。

檜谷: 誰か一人が現地に行って勉強して、報告するだけではだめですよね。同じものを見て、食べて、過ごして、思いを共有しなければ、プロジェクトの成功はあり得ないと思います。

額縞: 相手の問いに対して、なるべく早く対応するという責任も必要です。responsibility(責任)を、response(応答)するability(能力)と考えると、分かりやすいかと思います。

岡田: 私もよく相手先には「予定の飛行機に乗りました」などと、こまめな連絡を入れますね。

額縞: そうした些細なことの積み重ねが大切だと思います。きちんと反応を返していると「この人と一緒に仕事がしたい」「この人とは今後もお付き合いしていきたい」と信頼関係が築かれ、やがて大きな議論ができるようになる。学生を含め今の若い人たちは、そうした反応が遅いように感じます。ネットなど、情報をすぐに共有化できる環境にあるのですから、ぜひ素早く反応するように心掛けてほしいですね。

――昨今は、就職しても3年以内に離職してしまう、新卒大学生の離職率の高さが問題視されているようですが…。

額縞: それを解消するために本学ではキャリアデザイン教育について先進的に取り組んできました。今年度からは全学生がキャリア教育を受けられるよう必修科目としています。企業の方をお招きして、現場からの指導も行っていただいています。学生の皆さんは、入社する企業の規模だけで自己実現できるかどうかを判断してはいけません。会社という一つの型に自分をはめ込もうとするからいけない。表現したいことがあれば、会社に提案すればいいんですよ。

岡田: 私は若いころ、アメリカへの出張願いを3週間と書いて提出して、実際には長期間滞在したことがあります。それは、新しい車のラインをきちんと立ち上げて、稼働にのるまで見届けなければ、エンジニアとしての責任が果たせないと思ったからです。でも、日本に帰ってから、上司にとがめられることはありませんでしたね。

額縞: それは、会社の度量が大きかったからですよね。最近は、学生の度量も小さくなっているのかもしれませんが、企業にもそうした度量や余裕がなくなってきているのかもしれません。それから、今の学生は、言葉を見つけることが苦手な傾向がありますね。思いはあってもうまく伝えられないというもどかしさがあるように感じます。

> 語るスキルを
> 身に付ける前に、
> 思考する能力を
> 身につけるべき。

理事・OB 鼎談

［ 今、社会が求める人材像とは？ ］

自分なりの言葉で語る能力を身につける

岡田: よく就職面接で、同じような回答を耳にすると聞きます。面接がマニュアル化して、求人と求職のミスマッチが起きているようです。我々が面接するときは、わざと変な質問をして、一度本人の頭を真っ白にさせるんです。そこで再度質問をします。回答の内容自体ではなくて、自分なりの考え方で筋が通った回答をしているかどうかを判断しているんです。

額縁: 私も、推薦入試などの面接に立ち会うことがありますが、自分なりの言葉で表現しているかどうかは、大きな決め手になりますね。

檜谷: でも、大学は就職支援で面接の練習を行っているのでは？ それが通用しないということになってしまいますよね。

額縁: ステレオタイプの学生を作っている可能性はありますよね。どんな現場に行っても順応できる変幻自在の能力を身につけるためにはどうすればいいのか、我々は常に考えています。同じようなことが我々教員にも言えます。個性ある学生の育成の前に、個性ある教員集団の編成を目指さなければいけない。「山口大学憲章」の中には、学生と教員とが共に育む「共育」を掲げています。教員は最先端の知識や技術を教える。学生はそれを基に学んだことを成果として教員に返す。教員はそれを受け止め、自らの研究を検証しつつ、学生の疑問や発見に応えていく。年齢もキャリアも違うけれども、同じ教育環境にいるときは、共に教え合うというスタンスで臨まなければ、本当の意味での教育はできないと思っています。

檜谷: 私は物事を実行するときに、オーケストラのスタイルで行うのか、ジャズのセッションスタイルで行うのか、ということを考えるようにしています。オーケストラというのは、指揮者がいて楽譜があってパートに分かれて演奏するわけですよね。これまではオーケストラのスタイルでハーモニーを奏でてきた時代だったと思うんですよ。でも、今の時代は、ジャズのセッションスタイルではないでしょうか。ハーモニーは、その場その場で毎回違う。とりあえず吹いてみて、そこから生まれたハーモニーを評価する。現場で何を見出して、どう行動するかということが非常に重要になってくるわけです。さらに重要なポイントは、ハーモニーを奏でた後に「良かったよね」と、人々と共感できるかどうかだと思うんです。

自分を飛び越え、果敢に立ち上がれ！

――仕事をする上で求められる能力とは？

檜谷: 私がシステムエンジニアをしていた時代に読んだ本の中で印象に残っているのが「ピープルウェア」という言葉です。ハードウェアでもソフトウェアでもなく、ピープルウェア。つまり、人は取り替えのきかない資源で、プロジェクトを成功させるための大切な鍵であるという意味なんです。インターネットやスマートフォンの普及により、個人と個人がダイレクトにつながる時代になり、つながる範囲、ストライクゾーンは一気に大きくなりました。志を同じくする人たちとすぐにつながることができる。そんな環境の中で育った若い人たちが、これから何を考え、何をつくりだすのか。おそらく上の年代には想像もつかないイノベーションを起こすのではないかと期待しています。

額縁: 人材の「材」は、財産の「財」ですね。

岡田: これだけ世の中が多様化していく中で、世界中の人といろいろな場所で会うわけですよね。さまざまな国の人々と仕事をする上では、まずコミュニケーション能力、聞く能力が必要だと思います。その人が何を言いたいのか、何を期待しているのかを見抜く力、ある意味それは感性かもしれません。それから、自分とは違う意見をもつ人を許容できる素直さや柔軟性、協調性といった能力も必要ですよね。

檜谷: 必要とされる人財になるためには、好奇心やとらわれない向学心も必要だと思います。

額縁: 私は日頃から学生に「自分を飛び越えろ」と指南しています。自分という限界を少しでも越えようとするから学び、語り、苦しむ。そして、倒れるときは、前のめりに倒れる。いつも前向きにいようとすれば、倒れながらも進むことができるわけです。前のめりに倒れている人は、誰かがきっと助けてくれるはずなんですよ。

岡田: そういう前向きな人とは一緒に仕事したいと思いますよね。私も、若い人に話をするときは、「前心」という言葉を使うんですよ。つまり、前に進むための前向きの心を持ちなさいという意味なんです。難しいことに挑戦しようとするとき、自分に自信がないとき、目をつぶって半歩足を踏み出してほしい。そうすれば、流れに巻き込まれて、じたばたしながらもちょっとずつ進んでいけます。たとえ失敗したとしても、次に生かせば、それは成功へのプロセスといえるはずです。

> 多様に変化する時代だからこそ、モチベーションと自己展開力をしっかりと獲得してほしい。

新たな一歩を踏み出しCゾーンを広げていく

額縁: 先ほど、自分を飛び越えろと言いましたが、具体的な方法としては留学やワークホリデー、外国企業へのインターンシップなどが挙げられると思います。今いる場所を変えることで、新たな自分を発見することができるのです。

檜谷: 自分が今まで過ごしてきた環境から離れてみるというのは、非常に大切なことだと思います。自然体験活動のなかで、Cゾーンという考え方があるんです。Cはcomfortable（快適）の意味です。自分が快適なゾーニングから抜け出すのはリスクがありますよね。けれど、さまざまな経験を通じてCゾーンを広げていけば、世界は

自ずと広がっていくはずなんです。その成長を通して、自己発見にもつながっていくと思います。

纐纈: Cゾーン、面白い考え方ですね。

檜谷: よく自分の立ち位置や社会における役割は何なのか、という話になることがありますよね。それって、周囲のつながりや全体を見るから分かることであって、自分たちの中で探しても答えは見つからないんですよ。だからこそ、外に

出て、違う環境に身を置いて、自分の役割や立ち位置がどのあたりなのかを確認する必要があるのだと思います。例えば、過疎化が進む中山間地域に実際に学生が住んで、地域に役立つ、人に喜ばれることを経験してみるとか。

纐纈: なるほど、山間地留学ですか。留学先はなにも外国だけじゃないわけですよね。

檜谷: 現在、大学では、学群や学類といった、従来の枠組みにとらわれない柔軟な教育構造が必要とされてきていますよね。社会状況に応じて、そこに適応する大学の学びのかたちを変えていく必要があるのではないでしょうか。

纐纈: そのことについては本学でも検討中です。

檜谷: 私たちは人工物に囲まれた中で暮らしていますよね。でも、人工物って自然物というベースの上に成り立っているんですよ。都会に住んでいる人たちは、そういう感覚を忘れかけているんじゃないかと時々思うんです。

岡田: 私はクラブで考古学を学んでいたので、一人で島根の山の奥を歩いたり、山に登ったりしていました。いまの若い人

たちは、自然の中でのいろいろな経験が圧倒的に足りないような気がします。自分の身近なところだけで物事を完結させている傾向があるように感じます。なぜそんなことを思うのかというと、工場で働いている若い人は、意外とケガをしやすいんです。つまり、危険を予測できずに事故をおこす場合が多い。想像力に欠けるというか、小さいころから自然に親しむ中で培われるべき感覚、先を読む力、判断力というのが育っていないような気がします。

ナンバーワンではなく オンリーワンを目指す！

――これから先、必要とされる人材とは？

纐纈: 日本人である前に、まず国際人であるという自覚を優先させることが必要だと思います。そして、大学でも、国でも、絶対視しないこと。つまり、もっといいものがあるかもしれない、こうすればもっとよくなるかもしれないという想像力や発想力を持つことが重要です。地域の課題についても、もっと多様な視点から見直すことが必要だと思いますね。

岡田: 時代や社会が変わったとしても、基本的に人がもつべき能力や気質、人としての在り方は変わらないと思います。ただ、これだけ世の中がグローバル化して、物や人、情報がかつてないスピードで動き回る時代においては、物事の本質を見極められる高い能力が必要になってきます。目標に向かう前段階として、人としてのセンス、人間力をいかに磨くかということは非常に重要だと思います。そのためには、日頃から勉強やクラブ活動、社会奉仕活動など、さまざまなことに積極的にかかわり、経験を積むことが必要ですね。私は、入社した新卒者には、「なぜ私がこんな仕事をしないといけないのか」と疑問を持たずに、言われたことを無心でとことんやる、徹底して追求するように言っています。特に、入社して1年目が肝心。その後の成長は、その段階で決まってしまうような気がしますね。

纐纈: 大学も同じです。1年目でどれだけ勉強する習慣や、人づきあいができるかが肝心です。

岡田: 素直に考えればいいと思うんですよ。周囲の人は自分より知識も能力もあるのですから、いかにそこから吸収するか。そう考えれば、一生懸命取り組むようになるし、わからなければ自分から聞きにいく。そんな習慣を学生のうちに身につけておいてほしいですね。

檜谷: 受け身でいても何も生まれないですよね。

岡田: 基本的に棚からぼた餅というのはないと思っています。運を味方につける、そのための努力や鍛錬が必要だと思いますね。

纐纈: 必ずあなたにしかできないことがあるはず。ナンバーワンではなくオンリーワン。私でないといけない理由はどこにあるのか、今一度じっくり自分を見つめ直してみてください。

常に自分磨きを怠らず 前向き志向で挑む

――最後に、学生の皆さんへ向けて、メッセージをお願いします。

岡田: ぜひ、これだけは皆さんにお伝えしておきたい。何とかなるだろうという“根拠のない自信”をもってほしいと願っています。

檜谷: その言葉、大好きですね(笑)。

纐纈: 中国や台湾など、新興国の若者には根拠のない自信を感じます。とにかく手を挙げて、発言権を得てから、考えることが多い。日本の若者は、あれこれ考えて、行動できずにいる傾向が強い。できるからやるのではなく、やっていったらできるようになった、ということはよくあること。次のステージへ自分を駆り立てるためにも、根拠のない自信をもって挑むことは、必要なのかもしれませんね。

檜谷: よく第六感って言いますよね。その第六感って、実は勘ではなくて、それまでの経験に裏づけされた感覚だと思うんです。どれだけいろいろなことを経験してきたかによって、その人の第六感って変わってくるはずなんですよ。

岡田: その第六感を鍛えるためにも、自分にお金と時間を投資してほしいと思います。大学も会社も、意外と自由にさせてもらえる場所なのに、言われたことしかやらないのはもったいない。ぜひ、失敗を恐れず、日頃からいろいろなことにチャレンジし、とことん物事を突き詰め、自分の土台を広げていってください！

山口大学では様々な形で、最先端の研究成果を社会に還元しています。

繋がることでわかる日本史

人文学部の橋本教授が、様々な人達との出会いで見えてきた真実。

Profile

山口大学人文学部 人文社会学科 教授

橋本 義則 Hashimoto Yoshinori

京都大学大学院文学研究科国史学専攻指導認定退学。博士（文学）。
奈良国立文化財研究所主任研究官、山口大学人文学部助教授
などを経て、現在、同大学人文学部教授。
専門：日本古代史
著書：『古代宮都の内裏構造』、『平安宮成立史の研究』、
『東アジア都城の比較研究』（編著）など多数の著書あり

山口大学人文学部では「人間とは何か」「人間の在るべき姿は何か」という人間の根源的な問いを読み解いています。人文学部での勉強はその答えが明確にできない事かもしれません。過去には文理学部の名で「自然に挑み、読み解いて」きました。そのルーツは旧制山口高校にあります。その文科、理科は旧帝大への予科として、よりレベルの高い学問を修めるためその方法を学ぶ場所でした。言い換えればなりたいものに成り、何にでも対応できるフレキシブルな人材を育てる学部と言えます。型にはまらない異文化交流を進める人文学部から、今回は橋本義則教授に、これまでの研究成果に異文化交流がどれほど重要な役割を果たしているかを語っていただきました。

研究テーマ、「日本古代の支配階層の構造と変化」について

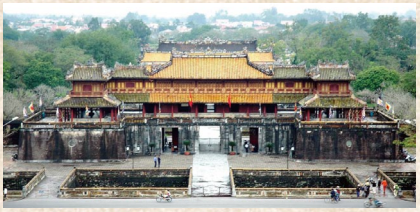
古代には色々な物事のけっこう大事なルーツがたくさんあるんですよ。でも、ルーツを探しているのではなく、この時代を知りたいといろいろ調べていくと、ルーツに繋がる予期していない副産物が見つかることがある。これが研究の始まりになるんです。

私の基本的な研究テーマは「日本古代の支配階級の構造と変化」。特に、日本の古代宮都の構造変遷に関する史的研究が中心テーマで、そこから“日本古代の支配階層”について色んな角度から研究を進めています。“日本古代の支配階層”については、貴族の存在形態とその変遷、彼らが形成する上層社会の変化について具体的材料を用いながらその様相を明らかにするため、次の諸点から研究を行っています。

1）古代宮都の空間構造の歴史的変遷に関する研究
2）東アジア都城の比較史的総合研究
3）古代喪葬制度の変遷に関する研究
4）古代女性史の研究
5）有識故実の形成に関する研究

理科系とは違い、実験で目の前に答えが出る学問では無いので、遺された史料を徹底的に読み解き、そして理論的に解明していくことになります。そのため比較研究をしているわけなんですが、中国や韓国と比較することで日本を知ることになるんですよ。同じような文化を持ったところと比較してみると、同じような現象でも原因が違っていたり、過程が違っていたりするでしょう？同じように、違うものと思われていたものが、実は同じルーツを持っていたと判明することもある。そうやって明らかにしていくことで、日本の固有性が見えてくるんです。

そうやって明らかになった事実は成果として情報を発信してきました。（著書『古代宮都の内裏構造』、『東アジア都城の比較研究』（編著）など）



踏査で訪れた ベトナム フエの紫禁城

東アジアでの墓地についての比較研究と東アジアの研究者との交流

6月末に中国の西安へ行ってきました。
科学研究費をいただいて10年間中国、韓国などの研究者と共同研究していた事業が今年度終了するので、次の研究に取り掛かるためです。日本と中国、韓国、いわゆる東アジアにおいて、当時の首都であった“都城（とじょう）”に住んでいた人々がどんなふうに葬られていたのかという墓地について比較研究していく予定です。漢字を使い、儒教を信じている文化圏の中で墓地がどのような在り方をするのか、どこが違うのか研究していくのですが、都（みやこ）はもともと政治的に造られるものなので、これは文化の違いというより、政治的な部分が大きいのかなと考えています。

7世紀末から8世紀、日本に火葬が入ってきて流行するには理由があります。学校ではこれを仏教が原因だと習っています。史料には仏教者である僧侶が亡くなり最初に火葬にされたとあります。これが仏教が火葬を流行させた理由だということですが、私は都市問題だと考えています。それまで何万人もの人が一カ所に集まって住む居住形態をとっていないんです。突然、何万人もの人が都城に集まって住むようになるんです。「藤原京」でおそらく5万～10万人いたはずです。当時の人たちの寿命が40歳～50歳ぐらいだとすると毎年かなりの数の人が死んでいます。当然、その遺体処理をどうするかという問題が出てきます。そうなるとこれは本当に宗教が理由ですか？となりますよね。私がこれを都市問題とするのはこういうことです。

従来は土葬されていた天皇ですが、持統と文武の二人の天皇が突然火葬に付されます。この二人の火葬は、飛鳥のとても神聖で、誰からも見られる場所で行われます。私はこれを、これからは死んだ者は皆、天皇と同じように火葬になると知らしめるためのデモンストレーションであったのではないかと思っています。その後、天皇は何代か続けて火葬にされます。しかし聖武天皇は土葬にされ、その後は土葬が続きます。平安期になり仏教が定着すると再び火葬が始まります。中には散骨され、お骨が残っていない天皇も何代かあります。こういったことが分かり始めると、東アジアの他の地域ではどうなのか、比較研究が必要になると私は思っています。

橋本教授の研究成果がよくわかる一冊

オススメ Book紹介

［ 古代宮都の内裏構造 ］ 橋本義則 著

長年の発掘調査により、古代宮都の構造が明らかになりつつある。天皇が居住し、宮都の中心をなす重要な区画である内裏の構造を、考古学と文献史料の成果を有機的に連関させ分析する。新たな古代宮都研究の方法を示す。（Amazonの「BOOK」データベースより）

この研究の一番の問題は、中国・韓国の研究の進み方です。韓国の研究者は我々に近い考え方ですが、中国の研究者は少し様子が違うんです。中華思想のためか、我々の研究には関心が薄いところがあります。政治的に不安定な関係の地域ですが、この東アジアの研究者との交流は、まさしく異文化交流だと思っています。各国の研究者と話をしても、政治と学術交流は全く違うものだとはっきり言います。どこかで繋がっていること、最後は「人と人の交流が大切」な事は何よりも考えなくてはならないと思います。
昨年、日中韓のチームでシルクロードを調査しましたが、どこでも歓迎されましたし、どこの国かは関係ないと感じました。絶えず人と繋がっていることは本当に大切な事です。

共同研究の大切さ

共同研究は大変です。みんな関心が違いますし、同じ方向を見ている訳ではありません。ある一定の成果が出る位しかできなくて、答えがでない事があっても、それでもそれぞれの地域での研究に反映してくれれば共同研究の意義はあると思っていますが、そのレベルから日本の共同研究は抜け切れてない気がします。

日本の共同研究のやり方はある一つの研究パターンをずっと守っています。テーマを決め、責任者を決めて共同研究をスタートさせるんですが、それぞれが自由にやるので、出てくるものはバラバラなんです。個別の論文が出てくるだけで、これは共同研究としては良くないと思っています。

私のやり方は違っていて、一定のテーマに従って、それぞれが答えを出し発表する。判らなければ判らないで良いんですよ。判らない理由が明確になればそれが答えです。

私が共同研究していく中で根幹的な研究者が二名います。一人は中央大学の妹尾達彦先生で長安の世界的な専門家です。もう一人は滋賀県立大学の田中俊明先生で朝鮮古代史では韓国の研究者からも一目置かれる権威です。この二人と出会えなければ、私の今やっている研究はありません。
これも異文化交流で、やはり人なんです。その人達にどうやって出会うか、どうやって見つけるか、そういったことが研究するということの大きなテーマになりますね。

増える調査の比較対象 広がる異文化交流

これまでも、東アジアに留まらず、ベトナム、モンゴルなども調査してきましたが、さらに、ヨーロッパにも興味を持っています。イギリス、イタリアはもちろん、トルコやレバノン、チュニジアなどローマ帝国の遺構が残っているところには行っています。
いつかローマの都市と東アジアの都城の違いを実地で比較してみたいと思っていますし、親しく

“日本を知るためには、異文化を知らなければいけない”

している三重大学の山中章先生（日本歴史考古学）とは中南米への調査をしたいと話しています。中南米では都市の跡が見つかり成果が上がっているんです。日本からも発掘に行っていて、それらも見ておく必要があるのかなと思います。調査の比較対象は増えていますね。そして、そういうところで色んな人と繋がっていく、それこそが異文化交流なんです。

これから日本史を学ぶ皆さんへ

研究室では、学生は自分のやりたい歴史学で、コンピュータの活用、資料をどうやって探すのか、ネットの検索方法を含め、社会に行って通用するようなスキルを学べるわけです。やりたい事でそれらができるんだからこれ以上楽しい事は無いでしょう？と学生には言っています。

歴史学を学びたいのなら、様々な知識を身につけることが必要です。知識として言葉だけでも知っていることが重要で、今の学生はそれを知らないですよ。世界史を習ったけど日本史は習っていないから知らないとか、そこから説明し始めると大学の授業は成り立たない。

知識を組み立てるには、自分ですることや、同世代の人間と切磋琢磨することが大切でしょうね。ある意味、そういったことで他と交わるのも異文化交流です。私の専門は日本史ですが、考古学の先生と付き合うのも異文化ですよ。学問が違えば言葉も違うからです。日本を知るためには、異文化を知らないといけない。

藤原実資の日記の読解の授業風景

山口大学人文学部 人文社会学科 歴史学コース
橋本 義則 研究室の詳細はここでCHECK! >>
http://www.hmt.yamaguchi-u.ac.jp/?page_id=199

Student's Voice

［ ゼミに参加した学生の声 ］

山口大学人文学部 2年
国史学研究室
城村 ひとみ さん

歴史学は「繋がり」をくれます。過去にいた人が考えていたことと、今生きている私たちが繋がること。いっしょに古文書を読み解く仲間が繋がること。乗り越えないといけないものが多いと結束力が自然と生まれます。わからないことが多くて時々悲鳴をあげそうになるけれど、楽しいです。

山口大学人文学部 2年
国史学研究室
畔田 端季 さん

橋本ゼミで成長したことは、どんな状況におかれても、頭を働かせて何か考えようとするようになったことです。ゼミの仲間と協力しあい、お互いを高めていくことの大切さも学びました。

山口大学人文学部 2年
国史学研究室
藤澤 彩加 さん

歴史学を学んでいく中で、知りたいことが記述されている史料がない場合が多く、史料探しには苦労します。古代の文書を読んでいると、その中に書かれている文化や制度が当時の社会においてどのような影響をもたらしていたのか考えると興味深く、それこそが歴史学の魅力だと思います。

山口大学人文学部 3年
国史学研究室
白川 愛 さん

少人数のゼミなので先生の指導をよく受けられるし、自分の研究テーマが決まったことであらためて歴史のおもしろさに気が付きました。今とは制度や思想も違う古代の日記を理解するには、その場面を頭の中に思い描く想像力が必要だと感じました。

山大の成果
～番外編～

Achievements

学長ウダヤナ大学名誉教授および客員教授の称号を受称

5月21日（火）、丸本学長が本学の協定校であるインドネシアのウダヤナ大学から、名誉教授および客員教授の称号を授与されました。これは、丸本学長が、「ODAによる中小企業の海外展開」の一環で、多機能フィルター㈱と共同開発したマルタクシートを使って、インドネシアのバトゥール山の大噴火による荒廃地の緑化支援のための調査を行い、製品の土壌流失防止および植生の回復効果を実証したことが評価されたものです。

ウダヤナ大学では、国内外を問わず初めての名誉教授の授与であり、式典には、バクタ学長を始めとするウダヤナ大学関係者の他、在デンパサール総領事の柴田和夫氏、本学からは、服部副学長（国際・地域連携担当）、富本副学長補佐、堀工学部長らが出席し、マスコミも取材に訪れるなど、約140人もの人々が参列する大規模な式典となりました。

また、式典では、かつて山口大学に在籍した学生による、同窓会の立ち上げも行われ、式は終始和やかな雰囲気に包まれました。

式典での受賞風景

地域貢献への取組み

山口大学では、大学の有する人的・物的資源を活用して、地域社会との連携を推進し、地域活性化、ボランティア等、さまざまな活動に取り組んでいます。

地域に開かれた大学としての取組み 2

「駐日ペルー共和国特命全権大使による講演会」

ー駐日ペルー共和国特命全権大使エラルド・エスカラ氏をお招きして講演会を開催ー

5月27日（月）、本学大学会館大ホールで、駐日ペルー共和国特命全権大使エラルド・エスカラ氏をお招きし、「日本とペルーの経済交流の展望について」と題して、講演会を開催しました。この講演会は、山口県ペルー協会との共催によるもので、学内外から約80人の参加がありました。

エスカラ大使は、日本とペルーとの貿易の現状等を紹介した後、投資対象国としてのペルーの強みや、ペルーが国際関係におけるミドルパワーとしてリーダーシップを発揮している事例について述べられ、また、環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）への日本の加入の必要性、ペルー、コロンビア、メキシコ、およびチリから成る太平洋同盟の政治・経済面でのメリットと、世界と日本の同盟への関心の高さについても熱く語られました。

ペルーについての情報はここでCHECK! >> http://www.peru-japan.org/

ーキミのやる気を応援！ー

おもしろプロジェクト

山大オリジナルの学生の自主的活動への資金支援制度、「おもしろプロジェクト」も今年で17年目。これまでに採択されたものから現在進行中のプロジェクト、その他の活動内容をご紹介します。

おもプロ 2013年度採択団体が決定！

第18回おもしろプロジェクト2013として、9つのプロジェクトが学内選考を経て決定しました。今回はその中から3団体をピックアップ！

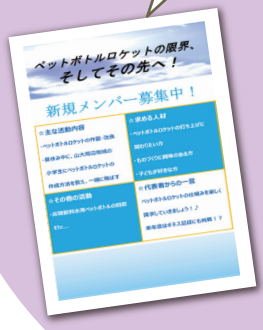
pick up! PROJECT 1 月1!!Global☆

プロジェクト参加者で1か月ごとにテーマを決め、そのテーマにそった国際交流イベントを企画。イベントごとに企画者・参加者両方が流動的に変わるスタイルを基本とし、テーマ・イベントも、そのときのテーマにそった専門家を招く講演会をしたり、地域の方と一緒に交流するイベントを行ったりするなど、メンバーで自由に自然発生的に決めていくところがプロジェクトの特徴である。

pick up! PROJECT 2 震災から何を想うか

まず被災地スタディーツアーで参加者を募り、事前学習で震災について考えるきっかけを作る。そして、実際に福島に行くことでしか感じることのできないことを、参加者にそれぞれの五感で感じてもらう。また、事後学習を通して感じたことを山口大学から山口県全体に発信。参加者自ら、東北の今を発信していくことで、山口県全体の意識向上に繋がる。

pick up! PROJECT 3 ペットボトルロケットの限界、そしてその先へ！



ペットボトルロケットにおける飛距離のギネス記録更新、また、地域の子どもたちにロケットへの魅力を知ってもらうことを目標とするプロジェクトである。夏季休暇中にペットボトルロケットの地域行事に協力参画やペットボトルロケットフェスティバルの開催を通じて、ペットボトルロケットに関する経験知識を向上させ、ギネス記録に挑戦する。

PROJECT 4 地域に物知り博士を増やそう！

PROJECT 5 ほーたるこいっ！

PROJECT 6 図書館Cafe

PROJECT 7 カンボジアの子どもたちに学校体育の素晴らしさを届けるプロジェクト

PROJECT 8 ソーラーカープロジェクト2013

PROJECT 9 Code Orange

おもしろプロジェクトの詳細はここでCHECK! >> http://ssct.oue.yamaguchi-u.ac.jp/omoprohp/index.html

What's New? YU-PRSS

《 学生スタッフYU-PRSSがお届けする、山大の最新情報 》

YU-PRSSとは？
ユープラス

広報誌「YU-INFORMATION」や、山大のWEBサイト内の「キャンパスライフ」ページなどの制作に携わる、山口大学広報学生スタッフです。

YU-PRSS（"Yamaguchi University Public Relations Student Staff"の略）は、「山大生のあなた（YOU）にも、そうでないあなた（YOU）にもプラスになる情報を届けたい」との想いを込めてつけられました。現在17名のメンバーで広報活動を行っています。

YU-PRSSメンバー

入江 貴博	石井 沙希	原殿 花織
長岡 奈緒子	中冨 真奈	武田 一志
前田 梨乃	城村 ひとみ	小形 智樹
吉岡 優一	長岡 真大	中山 拳太郎
河島 あかね	倉増 沙和	原田 海沙
溝口 明音	田里 翔太	

感想、取材依頼など、YU-PRSSにお気軽にメールしてください！

今月号についての感想や、今後こういった特集はどうだろうといったアイデア、こんな人を取材してほしいといったご要望も受け付けています。また、「私たちを取材してほしい」といったサークルやグループも大歓迎です。たくさんのメールをお待ちしています。

E-MAIL： campus@yamaguchi-u.ac.jp

「キャンパスライフ」はコチラをCHECK! >>
http://ds22.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~campus/campus_life%20_web/

01 本学創基200周年記念 第4回「知の広場」学術講演会 「本当の幸せって何？」

5月19日（日）、眼科医の服部匡志先生をお招きして、本学創基200周年記念「第4回『知の広場』学術講演会」を、医学部第3講義室で開催しました。このたびの講演会は、医学部学生有志「赤ひげプロジェクト」の学生たちが主体となって企画・運営を行ったもので、本学の学生や医学部進学を目指す近隣の高校生などを含む一般の方々など、約200人が参加しました。

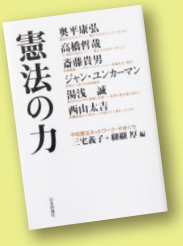
服部先生は、眼科医として国内の医療活動を行いながら、ベトナムにおいて無償で治療を行うとともに、ベトナム人医師に専門分野の最新技術を伝えるなど、ベトナムの「赤ひげ先生」として知られています。

講演会では、医学部を目指すようになったきっかけやある教授との出会いで眼科医となったこと、ベトナムにおける医療活動、医師としての心構えなどについてお話しいただきました。

02 纐纈理事（教育学生担当）が 共著で論文集と講演録集を出版

論文集『日本侵战与中国抗华』（A4半：全575頁）は、中国教育部からの経費支援を受け、2010年から開始された日中共同研究プロジェクトの成果物です。同論文集に纐纈理事は、「日本の対中国戦争指導体制の方針」及び「近代日本の戦争指導体制と対中国侵攻計画」の二本の論文を発表。合計で200枚を超す二つの論文は、2011年11月に重慶市の西南大学で開催された同プロジェクトのシンポジウムで報告された内容をベースに執筆され、同論文集の巻頭論文として収められています。

近年、中国における近代史研究では、一方的な日本の侵略戦争批判ではなく、なぜ日本が侵略戦争を選択したのかについて、日本近代史総体を洗い直すなかで、その原因を究明しようとする視点が有力になっており、そうした中国側の要請に応えるための研究成果であります。



講演録集『憲法の力』（四六半：全243頁）は、纐纈理事が長年取り組まれている、市民と一緒に開催している憲法を学ぶ運動の成果物です。著名な憲法学者である奥平康弘氏、哲学者の高橋哲哉氏、評論家の斉藤貴男氏、映画監督のジャン・ユンカーマン氏、社会運動家の湯浅誠氏、元毎日新聞記者の西山太吉氏、そして、女性史研究家の三宅義子氏ら、纐纈理事と親交の深い方々が、山口の地で行った講演を纏めたものであり、理事自身の講演も収められ、同時に三宅氏と共同編集に携われました。憲法論議が活発化してきた状況のなかで、冷静かつ学際的な視点から憲法を問い直す場を提供したいとの思いから出版されたものです。

YU-INFORMATION
ワイユーインフォメーション
山口大学広報誌　Vol.114

山口大学総務部広報課
〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1
TEL：083-933-5007 FAX：083-933- 5013
E-MAIL：sh011@yamaguchi-u.ac.jp.
URL:http://www.yamaguchi-u.ac.jp/

今月の
NEWS &
TOPICS

03 大学教育機構 留学生センター長の福屋利信教授が単行本「植民地時代から少女時代」を発表

現在、日韓の間には、歴史認識問題や領土問題が存在しています。その影響で、韓国には反日、日本には嫌韓という現象が一層の高まりを見せており、日章旗を焼いたり在日コリアン排斥デモをしたりすることが、日韓双方で愛国心の吐露であると勘違いされています。しかし、それは両国の国益を損なう行為であって、真の愛国心には程遠いものです。聡明な日韓両国民は、お互いの意地を払拭して、「反日と嫌韓を越えて」いく知恵を絞る時代が到来することでしょう。この本のタイトルにおける「植民地時代」の言語使用は日韓の悲しい過去を象徴し、「少女時代」のそれは、その過去を乗り越えた先に見えるであろう来来を象徴しています。

04 大学院 理工学研究科感性デザイン工学専攻の小金井真准教授が空気調和・衛生工学会功績賞を受賞

空気調和・衛生工学会ガイドライン・マニュアル委員会において「SHASE規格類体系化のための関係規格類情報リスト」の整備等に尽力され、「規格類関連技術情報の整備」に多大な功績を残したとして表彰されたものです。

05 大学院 理工学研究科建築デザイン工学分野の鵤 心治教授が2013年日本建築学会賞(論文)を受賞

受賞内容は「人口減少下の地方都市におけるまちづくり手法に関する一連の研究」。人口減少下にある地方都市を対象として、地域協働と都市計画の研究拠点となる専門的なまちづくり支援組織を既成市街地に構築しながら、広域化、拡散する地方都市郊外部の地域協働による土地利用規制、誘導方策を科学的に検証し、同時に、衰退する中心市街地の都市再生手法を一体的に検討して、都市全体としての規制、誘導、事業、合意形成に関するまちづくりの実現手法を総合的に提示したことが高く評価され、受賞に至ったものです。

06 ヤマミィの日／ヤマミィグッズ発売開始

毎月10、20、30日は「ヤマミィ」の日です。ヤマミィが、11:50~12:45の間、各キャンパスのどこかで遊んでいます。ヤマミィをみつけたら、「ヤマミィスタンプカード」にスタンプを押してもらいましょう。スタンプを集めると「ヤマミィグッズ」がプレゼントされます。なお、土日祝日、雨天時及び試験期間中等はお休みしますので注意してください。「ヤマミィ」のぬいぐるみ及びミニストラップが各キャンパスの学内売店等で購入可能となりました。是非、ご利用ください。

編集発行/山口大学広報委員会
西田輝夫(副学長. 総務企画担当)／坪郷英彦(人文学部)／菊屋吉生(教育学部)／平中貫一(経済学部)／川村喜一郎(理学部)／大和田祐二(医学部)／山本節夫(工学部)／竹松葉子(農学部)／度会雅久(共同獣医学部)／向山尚志(技術経営研究科)／何暁毅(大学教育機構)／平井信義(大学研究推進機構)／小河原加久治(大学情報機構)／片山信一(総務部広報課)
企画・編集・撮影・デザイン／株式会社 無限

EVENT SCHEDULE [イベントスケジュール]

8 AUGUST

02(金)~9/29(日) 夏季休業
(9/30後期授業開始)

02(金) OPEN CAMPUS
場所:小串キャンパス

03(土) OPEN CAMPUS
場所:吉田キャンパス

04(日) OPEN CAMPUS
場所:常盤キャンパス

9 SEPTEMBER

10(火)~13(金) AO入試

24(火) 山口大学 共育ワークショップ2013
「みんなで山大の教育(共育)について語ろう!」
場所:第二学生食堂「きらら」
対象及び定員規模:本学の教員、職員、学生(TA・SAを含む) 60名程度

27(金) 山口大学学位記授与式／卒業式
場所:大学会館ホール

山口大学大学院入学式
場所:大学会館会議室

Next Issue 次号予告

社会を動かすシステム

社会の基盤を組み立て、モノの流れを制御する。このシステムを担う工学部と経済学部の成果を紹介します。どうぞお楽しみに!

「志」つなぎ 伝える
二百年

創基200周年
山口大学

2015年に山口大学は創基200周年を迎えます

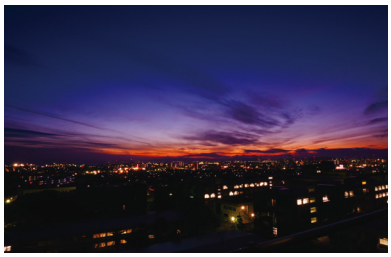
山口大学は，長州藩士・上田鳳陽により創設された「山口講堂」をルーツとし、明治・大正期の学制を経て、1949年に地域における高等教育および学問研究の中核たる新制大学として創設されました。来る2015年（平成27年）には創基200周年を迎えます。山口大学は，地域に根ざした大学として、さらなる充実と飛躍を期し、次なる100年をより有意義なものにするための記念事業を計画しています。

2013年度　創基200周年NEWS

山口大学では、200年の歴史を多くの皆様に伝えるための講演会，
シンポジウム、また、地域のニーズに合わせた様々な行事，
学生の企画によるイベント等の各種記念事業などを実施します。
ここでは、それら創基200周年に関連した最新ニュースを紹介していきます。

山口大学キャラクター「ヤマミィ」

第2回フォトコンテスト
『写真で残そう！山大なう』受賞作品決定



金賞　「常盤キャンパスから望む昼と夜の境界線」
山本 綱之 さん（工学部 教職員）

山口大学では、創基200周年を記念し、フォトコンテストを実施しています。
　第2回となる今回は、2012年8月から2013年3月までの8カ月にわたり募集を行ったところ、後世に残したい山口大学の“今”を写した作品108点の応募をいただきました。厳正なる審査の結果、金賞1作品、銀賞2作品、銅賞3作品が決定しました。

第2回フォトコンテストの詳細は
ここでCHECK! >>
http://www.yamaguchi200.jp/index/page/id/256

Back to the Past　バック・トゥ・ザ・パスト

山口大学の過去と現在の姿を比較しながら、200年の歴史を振り返ります。

第2回 ［昭和41年］
移転工事中の山口大学

昭和41年、山口市吉田での移転工事中の山大の様子。遠くに今では見る事ができない煙の上がった煙突や消失前のサビエル記念聖堂が写っています。この年に完成していた建物は、農学部、体育館、教養部、女子寮、解剖棟だけで、講義棟、吉田寮、1学食、動物病院、農場はまだ工事中でした。

創基200周年の詳細はここでCHECK! >>　http://www.yamaguchi200.jp/